

定義と 説得的定義

定義は重要

- 何が問われているか、何が争われているか、言葉がどういう意味で使われているかをはっきりさせるだけで解決する場合がある。
- そもそも自分がなにを言ってるかわからないのでは話にならない。（e.g. ジュディス・バトラーの「パフォーマティヴィティ」）

記述的意味と 規範的意味

- 道徳的な会話に使われる「浮気」「不倫」のような語には、記述的意味と規範的／価値的意味が含まれている。
- 記述的には「不倫」は「結婚パートナー以外とセックスすること」ぐらい。これが悪いことかそうではないかは、検討の余地がある。
- しかし、「不倫は悪い」が常に（トリヴィアルに）真であるような使い方をする人々もいる。
- 「悪くない不倫は不倫とは呼ばない」のような若干トリッキーな表現を使ったりする。

- その問題になってる言葉に、もともと価値判断が含まれているかどうか注意！

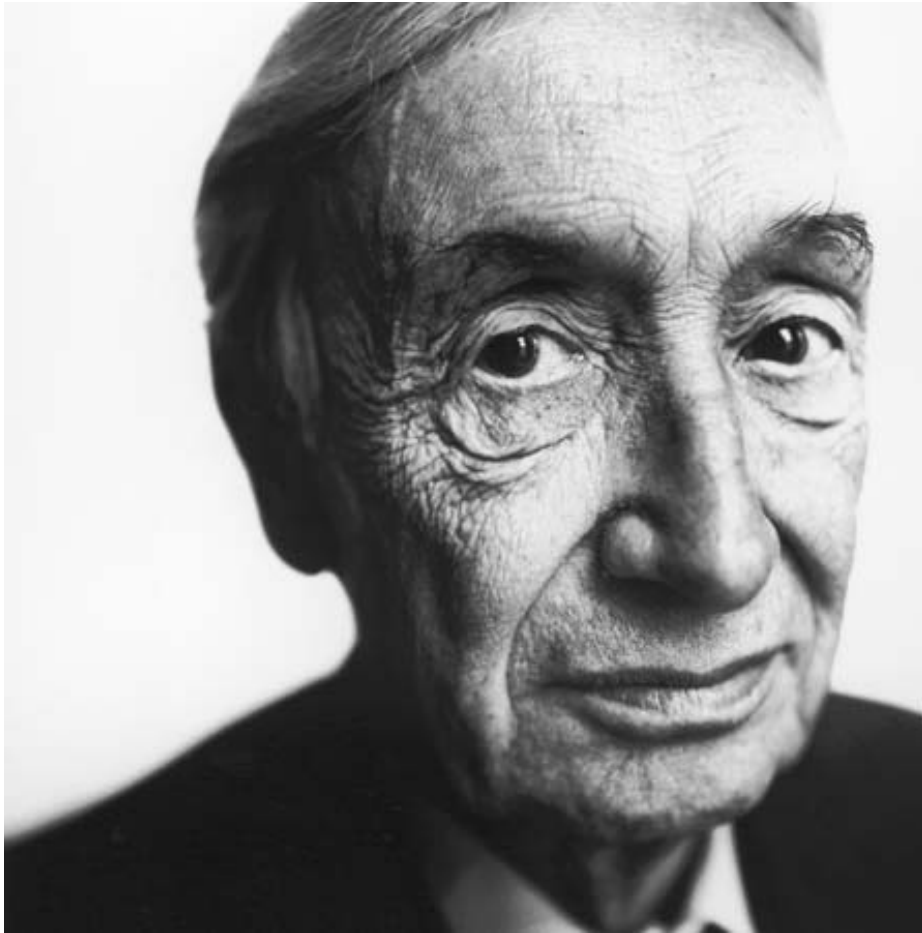
江口の好み

- 言葉の対象はいつも具体例を挙げられるようにしておきたい。
- 混乱を避けるために、対象をなるべく記述的な意味でのみ定義する。
- 価値評価は「賞賛されるべき～」 「よい～」 「許される～」 「悪い～」 「許されない～」 「非難に値する～」 のように明示する。

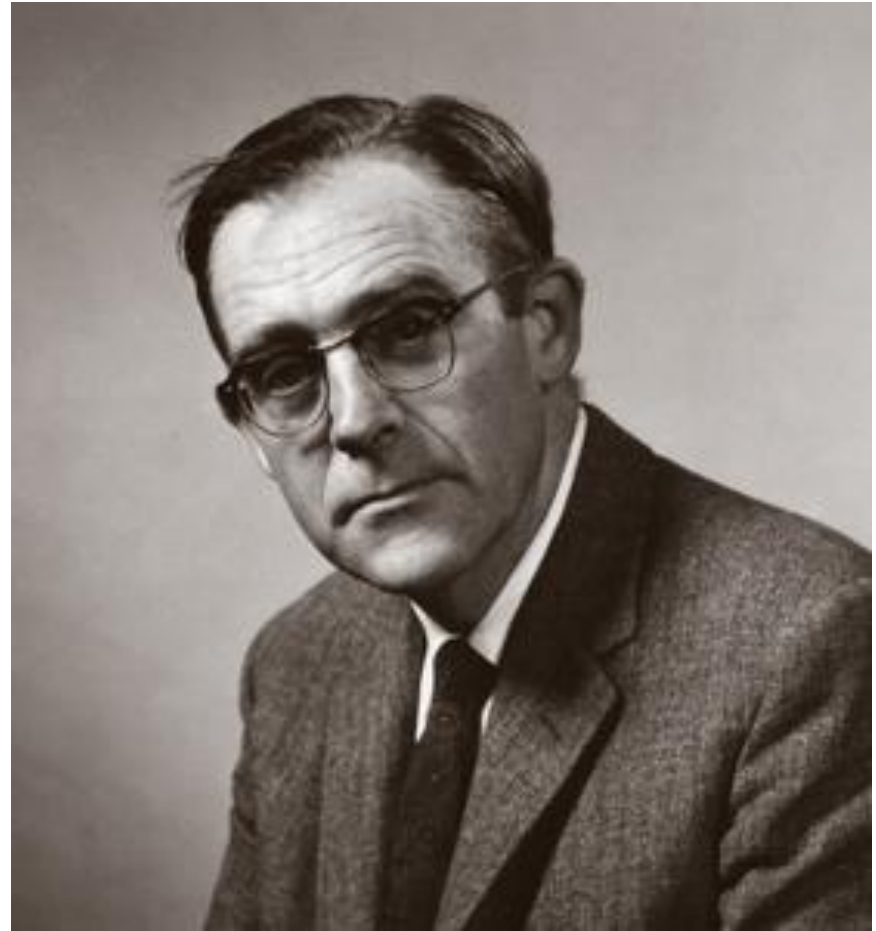
ちょっとだけ メタ倫理学上の情動主義について

- 道徳語や、その定義の問題を考えるときに、情動主義（表出主義）という立場を意識しておくのはいまだに重要。

A.J.エアと スティーンソン



A. J. Ayer 1910-1989



Charles Stevenson 1908-1979



情動主義

- 道徳判断は感情や態度を表出し、同時に聞き手に影響を与えようとする行為。

-

万歳セオリー

- 「泥棒は不正だ」のような発言は、「泥棒！」という感嘆文や、「泥棒はやめろ！」という命令文に近い。
- 「ばんざーい！」や「こらーっ！」に近い。なにかの性質を記述しているのではない。

「不倫」を評価的な意味を 含めて使う場合

- スティーブンソンは多くの道德判断が、記述の意味と評価的意味に分けることができると考える
- 「君がしていることは不倫だ」 = 「君は婚外セックスをしている」 + 「君は非難されるべきだ／それをやめろ！」

非難と称賛

- 非難や称賛は人々を動かす。人々から非難されるのは不快であるため当人は行動を抑制し、称賛は快適であるため行動が促進される。

「本当の」の罠

- 「本当～とは」という説得方法はよく使われる。「本当の自由とは」「本当の愛とは」「本当の友情とは」
- 善悪などの価値を含んだ言葉(自由、愛、友情etc)は曖昧な場合が多い。そうした言葉を、勝手に定義しなおすと、人々はもとの言葉が含んでいるポジティブ・ネガティブ価値をその定義にももちこみ、そのように定義された性質や行動などに好感・反感をもつ。
- 「説得的定義」。「本当の～」にはいつも注意。

富田隆

- 「つまり、ほんとうにモテるというのは、数多くの女性を相手にすることとは違うのである。このあたりを、「モテない」と嘆く男性は誤解しているのではないだろうか。・・・（中略）・・・一人の“いい女”を見つけ、彼女にモテるようになるにはどうしたらいいかを考えることがたいせつだ。自分にとってのいい女にモテる男こそが、ほんとうのモテる男なのである。」

（富田隆, 『「モテる男」40のマニュアル, 三笠書房, p.19）

森岡正博

- モテ／非モテということが、男子のあいだで話題になっているようだ。（中略）モテは、「ちょいモテおやじ」みたいに、いろんな女にちやほやされて、性的な視線を送られることというふうに理解されることが多いと思うが、そこをコペルニクスの転回しないといけないように思うのである。そもそも、「いろんな女からちやほやされたい、あわよくば、いろんな女とエッチしたい」という願望は、「権力欲」にほかならない。このような権力欲に裏付けられたモテにこだわっているかぎり、光明はさしてこないだろう。（沼崎一郎はこれを「男力」として批判している）。

森岡正博

- 私が思うに、本当の意味でモテる男とは、次のような男のことである。
- 「モテる男とは、「自分の好きなひとりの女を恋人として大切にすることができる」男のことである。」
- そういう男になることができたなら、その結果として、「ただそこにいるだけで、まわりの女たちに、異性としての快い刺激を与え、かつ、安心させることのできる男」に、長い時間をかけて徐々に近づいていくことができる。(森岡正博)

沼崎一郎

- 「いいですか、ここに書いてあるのは、精神的暴力と呼ばれるものです。殴る蹴るだけが暴力じゃないんですよ……」・・・さらに、経済的暴力と性的暴力についても補足を加える。経済的暴力の例としては、
「デートの際、男が食事をおごる」ことを挙げる。おっと、今お読みのあなたも「え？」と思われましたか？そこで学生たちは再び騒ぎ出すが、構わず話し続ける。「お互いに収入のない学生同士なのに、なぜ男がおごらなければならないの？金もないのに、なぜ男は無理しておごろうとするわけ？それは下心があるからに決まってるでしょ。何度もレストランでおごられたり、いろいろプレゼントをもらっていたら、段々それが負い目にならない？・・・こんなにしてくれるのは私を愛してくれる証拠だから、応じてあげなきゃ悪いかなあなんて考えたら、それは男の思う壺だぜ」。(沼崎一郎『ジェンダー論の教え方』)

- 「あなたの本当の幸せ(利益)のために～」 という強制や干渉は現代でもありえる。

「本当の」の罠

- 「本当～とは」という説得方法はよく使われる。「本当の自由とは」「本当の愛とは」「本当の友情とは」
- 善悪などの価値を含んだ言葉(自由、愛、友情etc)は曖昧な場合が多い。そうした言葉を、勝手に定義しなすと、人々はもとの言葉が含んでいるポジティブ・ネガティブ価値をその定義にももちこみ、そのように定義された性質や行動などに好感・反感をもつ。
- 「説得的定義」。「本当の～」にはいつも注意。

富田隆

- 「つまり、ほんとうにモテるというのは、数多くの女性を相手にすることとは違うのである。このあたりを、「モテない」と嘆く男性は誤解しているのではないだろうか。・・・（中略）・・・一人の“いい女”を見つけ、彼女にモテるようになるにはどうしたらいいかを考えることがたいせつだ。自分にとってのいい女にモテる男こそが、ほんとうのモテる男なのである。」

（富田隆, 『「モテる男」40のマニュアル, 三笠書房, p.19）

森岡正博

- モテ／非モテということが、男子のあいだで話題になっているようだ。（中略）モテは、「ちょいモテおやじ」みたいに、いろんな女にちやほやされて、性的な視線を送られることというふうに理解されることが多いと思うが、そこをコペルニクスの転回しないといけないように思うのである。そもそも、「いろんな女からちやほやされたい、あわよくば、いろんな女とエッチしたい」という願望は、「権力欲」にほかならない。このような権力欲に裏付けられたモテにこだわっているかぎり、光明はさしてこないだろう。（沼崎一郎はこれを「男力」として批判している）。

森岡正博

- 私が思うに、本当の意味でモテる男とは、次のような男のことである。
- 「モテる男とは、「自分の好きなひとりの女を恋人として大切にすることができる」男のことである。」
- そういう男になることができたなら、その結果として、「ただそこにいるだけで、まわりの女たちに、異性としての快い刺激を与え、かつ、安心させることのできる男」に、長い時間をかけて徐々に近づいていくことができる。(森岡正博)

沼崎一郎

「いいですか、ここに書いてあるのは、精神的暴力と呼ばれるものです。殴る蹴るだけが暴力じゃないんですよ……」・・・さらに、経済的暴力と性的暴力についても補足を加える。経済的暴力の例としては、「デートの際、男が食事をおごる」ことを挙げる。おっと、今お読みのあなたも「え？」と思われましたか？そこで学生たちは再び騒ぎ出すが、構わず話し続ける。「お互いに収入のない学生同士なのに、なぜ男がおごらなければならないの？金もないのに、なぜ男は無理しておごろうとするわけ？それは下心があるからに決まってるでしょ。何度もレストランでおごられたり、いろいろプレゼントをもらっていたら、段々それが負い目にならない？・・・こんなにしてくれるのは私を愛してくれる証拠だから、応じてあげなきゃ悪いかなあなんて考えたら、それは男の思う壺だぜ」。(沼崎一郎『ジェンダー論の教え方』)

- 「あなたの本当の幸せ(利益)のために～」 という強制や干渉は現代でもありえる。